



明るい浴室。基本的にすべて人の手で入浴



カラオケ以外にも麻雀、手芸、書道、折り紙、はがき絵など、それぞれの趣味を楽しむ(上)。材料にも味にもこだわる食事。人によっては刻み食やとろみ食に調理、口から食べることを第一に心がけている(左)



入居約2年の中尾優江さん(79歳)。「毎日いろいろな催し物が多いので退屈しません」

高齢者ホーム最前線

介護の現場は施設長の良美さん、経営は社長の利昌さんと、夫婦の息はぴったり

踏まれても踏まれても土の中から顔を出すつくしんぼ。そんな雑草のようにたくましくと名づけられたのが『ケアセンターつくしんぼ』だ。きっかけは今から16年前、施設長の良美さんが特別養護老人ホームに勤務したときには



地域の住民と二人三脚 理想の介護を目指して

NPO法人からスタートし、さまざまな困難を乗り越えて設立された念願のホーム。何よりも介護される人の身になって、人の手のぬくもりを大切に、きめ細かく質の高い介護がここにはあった。

じまる。初めて介護に携わった良美さんは、機械的で、まるで流れ作業のように入居者が扱われていることに大きな疑問を感じた。そして仕事に打ち込むほどに、「もっと納得のいく介護をしたい、それができないのなら自分でやるしかない」との思いを強くしていった。

地域住民の努力と熱意がホームを立ち上げた

夫の利昌さんとも思いは一致した。さらに地元の有志を募ってNPO法人「鶴川にケアセンターをつくしんぼ」を設立、社長の利昌さんが町田市や東京都に日参して、ようやく認可を取り付けることができた。今はすべて満室、口コミで入所希望者は引きも切らない。まさに『婦唱夫随』の成果だ。このような経過を経て作られた『つくしんぼ』には、施設長が理念として掲げる質の高

アセンターを作ろう会」を結成、土地探しから始めた。

苦労の末、ようやく借りられる土地は見つけたものの、もっと大きな壁が待ち構えていた。当時の町田市は、民間の老人ホームの建設は一切認めないというのだ。しかし、メンバーの決意はこんなものでは少しも揺るがなかった。N

い、充実した介護が実現されている。

「すべては人の手で」が介護の基本

その一つが全国でも有数のリハビリテーション施設。「寝たきりにさせない」を合言葉に、理学療法士二人を常駐させ、楽しく、無理のないトレーニングで機能回復を図る。入院中に歩けなくなった人も歩けるようになり、自信とやる気が出て、さらなる好結果を生んでいるとのこと。

また、自慢できるのが食事。

三度のおかずもおよつもみんな手づくりで特にお米にこだわっている。入居者の一人中尾優美江さん(79歳)は「ここは食事は



寝ているときはもちろん、座っていると古タオルで作ったお手製のクッションで床擦れを防ぐ

専門職である理学療法士によるリハビリ。生活機能の向上に効果的(右) 前庭にある家庭菜園。野菜の収穫や芋掘りなどの行事も行う(左)



ケアセンター つくしんぼ